

文部科学省指定事業 清水町立清水中学校

はじめに（本校の研修について）

1 本校の研究

自ら探究し、「問い」を生み、再構築に向かう生徒の育成 ～英語授業を中心とした、つながる発信力の強化～

(1) テーマ設定の理由

本校生徒の実態として、自己の必要な情報を整理して、理解したことを自分の言葉でまとめることに苦手意識があることが挙げられる。ほとんどの生徒が与えられた課題に真剣に向き合えるが、自分で課題を立てるところまでいかないため、得た情報を自分の意見と比較して吟味したり、関連づけたりするなど、自分ごととして捉え表現するまでに至っていない。自分ごととして学習問題に向き合い、思考し判断したことを言葉として表現することの繰り返しは学びの「再構築」につながり、「確かな学力」に結びつく。文部科学省指定事業を受け、そこに向かうアプローチとして今年度は英語授業を中心としてつながる発信力の向上をねらう。英語授業における表現力は、大きなウェイトを占める。しかし、どの言語に限らず、伝えることは意外と難しい。それは、相手の立場を考え、多角的な視点で見て、自分なりの根拠をもって発信していかなければ、聞き手に伝わらないからである。英語授業において、発信力の向上を目指した授業展開の工夫や指導の方法を開発し、授業研究などを通して他教科に展開させていくことで、本校生徒が様々な視点を獲得しでのびのびと発信していく姿に変容することを期待している。

(2) 学校教育目標、重点目標との関連

本校学校教育目標「志をしなやかに育む生徒」
重点目標「自他の考えを尊重し、つながる発信力で学びを深める生徒」

①「自他の考えを尊重し」について 【安心・受信】

現代は、人それぞれの価値観や考え方が多様化している。そんな中で、他者の意見を受け入れることはなかなか難しいものである。本校生徒の表現活動への苦手意識も根底に他者理解の難しさがあるといえる。そこで、本校では授業を中心とした様々な場面において、他者を受け入れることのできる「受信」の力を向上することをねらう。基礎となるのは全ての授業の約束として取り組んでいる、「授業の聴き方」の徹底である。その上で本校が今まで培ってきた防災道徳や、2年前より実践している p4c による「多様な表現の場面設定」を基盤とする取組により、生徒が自らの考えをしっかりと持ち、他者の意見に耳を傾ける態度を身に付けることで、自他の考えの尊重につなげていきたい。道徳授業を中心として行われる p4c では、自分たちの疑問や解決したい問いを出発点とした対話的活動を取り入れていく。自由な発想で表現できる場を設定することで、多角的な視点で自分の考えを深めていく楽しさを実感できるようにしていきたい。また、それらを支える基礎的な活動として、「NIE（新聞の読み取りやそれに伴う表現活動）」により、資料の内容と主旨を正確に読み取り、疑問や問いを生み出す力の向上を目指す。今年度は、より自分ごととして記事を読み込んでいく姿に期待して、読み取り後の発展活動である「問いコンテスト」を行っている。また、全ての表現活動の基盤である「安心」は、日頃の学級経営や教科授業の在り方を中心につくられていくものである。研修部やミドルリーダーが中心となり、「一人一授業」による授業公開、「清中カフェ」と称したミニ研修などで、全ての生徒が安心して学級に所属できるように努める。

②「つながる発信力で学びを深める」について 【発信】

相手に自分の思いを伝えるときに、ただ単に言葉の羅列だけでは伝わりにくい。相手の立場や状況を把握した上で、適切な言葉を選んで、相手が理解できるようにわかりやすく伝えていく必要がある。つながる発信力とは、上記①「自他の考えを尊重し」を基に、生徒と生徒、生徒と授業者がそれぞれの考えを述べていく中で、生徒がもっている知識や考えを整理しながら、新たな問いや考えを生み出す「学びを深める場面」への手立てである。アプローチは各教科や単元によって違いがあるが、その教科や領域の特性を生かして、本校生徒がつながる発信力を強化していくことを期待したい。

(3) 全校で取り組んでいる「つながる発信力」への実践について

①防災道德

平成 29 年度から本校の一つの柱である“防災道德”「あなたならどうする (モラルジレンマ)」を通し、その場で、自分なりの判断や決断をせまるような発問構成の工夫や、地域について考え、近年どこにでも起こりうる自然災害に備えるための狩野川という身近な題材の設定により、主体的に考え、判断できる子どもの育成や道徳的実践力の向上について研修を積み重ねてきた。防災道德における、「導入や中心発問の提示」、教師のゆさぶりの支援は、子供にとって様々な葛藤と真剣に向き合い、自らの考えを発信するきっかけとなっていると考えられる。

②p4c (philosophy for children : 子ども哲学)

研修を支えるものとして、気の合う同級生集団 (安心) のもと、多種多様な「問い」を自分たちの追究を表現 (発信) し、多様な価値観を受け止め (受信) することを目的に、道徳の時間を活用して p4c の取組を行っている。p4c とは、疑問や考えを安心して自由に話せる場であると同時に、参加者同士で互いの話を聴き合う場でもある。安心して自由に発言できる場だからこそ様々な意見を聴くことができ、思考に広がりや深まりが出るのが期待される。前期に 1 回、後期に 1 回道徳での授業を行うが、生徒の興味・関心によっては、授業や学活・総合・生徒会活動など、様々な領域で展開も進めてきている。本年度は 3 年目の取組となる。



p 4 c の 4 つの約束 (セーフティー)

- コミュニティーボールを持った人だけが話せる
- 話をしたくなければパスができる
- まだ話をしていない人を優先する
- 相手を傷つける言葉を使わない

※「清水中式 p4c」

道徳を中心とした p4c の手法で、一斉授業や読み物資料、モラルジレンマを取り入れた授業展開だけではなく見られない生徒の多角的な視点や多面的な考え方を引き出すことができると考えた。しかし、p4c はその集団の「安心感」を前提とするため、学級の雰囲気によって一人一人の発言の自由度が左右されることもあった。また、一般的に p4c は 10 人程度の人数が意見を述べやすいと言われているため、35 人学級での実施では、意見は自分なりの意見をもてたとしても、深い理解への切り込みには課題が残った。そこで、より効果的に子供達が意見を言える・話し合える手法を模索してたどり着いたアイデアが「二重円」による実施である。昨年度より以下の実践を行っている。

- ① クラスを半分 (10~15人) に分ける。
- ② p4c の実施時間を前半・後半に区切り、交代制で行う。
- ③ 後半グループの人は、前半グループの人とペアになるように座る。
- ④ p4c の途中で、前半グループと後半グループのペアが、その時点での意見について「相談・交流」する時間を設ける。

特に、二重円の④により、生徒はより発言する様子が見られ、授業後の振り返りにおいても様々な視点を取り入れた自分なりの意見を書くことができる生徒が増加した。

③N I E

金曜の朝読書の時間に新聞を活用した教育「N I E」を取り入れ、短い内容の記事から、資料を読み取る。新聞社が提供しているワークシートを活用し、新聞の内容から出題される問題に答えたり、意見をまとめたりすることで、資料を読み取る力・思考力の向上を目指す。

3色マーカーを全校で購入し、赤（答えの根拠）黄（興味をもったこと）緑（疑問に思ったこと）を整理する。

3色マーカーの使用について
赤→ 答えの根拠となる部分
黄→ 興味をもった部分
緑→ 疑問に思った部分



文部科学省指定事業を受けて

1 【 英語科として発信力の捉えを共通理解する 】

文部科学省指定事業を受け、すぐに行ったことは英語科による「発信力」の定義である。「はじめに」で先述したように、本校では生徒が自ら主体的に物事に取り組んだり、思考を育んだりする姿勢を目指して研修に取り組んでいる。授業の中で生徒から出る「問い」に対して「自分なりに」答えていくということである。全職員で学校の発信力を共通理解した上で、英語科で発信力を「自分の学びや経験を生かす」「場面や状況に合わせる」「相手の立場を考える」をキーワードに以下（2）のように定義した。そうした共通理解をとることで、英語の授業を通してどんな力をつけたいのかを明確にして授業を展開していけるようにした。

もちろん、英語科だけではなく、全教科でこの「発信力の具体的な捉え」を行い、それらを生徒が体現できるような授業構成を研修している。

(1) 学校として考える発信力

重点目標「自他の考えを尊重し、つながる発信力で学びを深める生徒」

[安心] 言い合える安心感・雰囲気作り

[受信] 伝えられたことを受け入れ、自分の考えと照らし合わせる。

[発信] 根拠をもって伝える・分かりやすく伝える・改めて、相手に意見を述べる。



(2) 英語科として考える発信力

☆ +1文で伝えることができる。

eg. Do you like sports? → Yes, (I do). I like tennis. I often play it.

☆ +1文で聞き返すことができる。

eg. Do you like sports? → Yes, (I do). I like tennis. How about you?

eg. Do you like sports? → Yes, (I do). → How long have you been playing it?

☆ その場に合わせた反応をすることができる。

eg. I like tennis. → △ Me too! ○ Me too. I like Kei Nishikori.

△ Really? ○ Really? Who's your favorite player?

☆ 短い文だとしても、分かりやすく伝える。(長い文だけを正解としない)

eg. I have a brother who is cool. → My brother is cool!

☆ 自分事として、伝える。

eg. 静岡の良い点を紹介しようのテーマで・・・

△ Shizuoka has Mt. Fuji. It's the highest mountain in Japan! (周知の事実のみ)

○ I see Mt. Fuji every day. We can enjoy different scenery in each season. (実体験)

☆ 相手の立場を考えて伝える。

eg1. △ Tanjirou is my favourite character.

○ Do you know *kimetsuno yaiba*? Tanjiro is a main character. I like him!

eg2. (外国の子供に、静岡のオススメを紹介するときに・・・)

△ You should visit Mt. Fuji! It's the highest mountain in Japan!

○ You should visit Mito Sea Paradise! You can watch a dolphin show!

☆ 聞き返すことができる。

eg. (ALT や友達が行ったことに対して・・・)

What do you mean? / Perdon me? / Why do you ~? / What about ~?

Tell me more. / Could you say that again? / ...

2 【 上記発信力を試す・高めるための実践 】

(1) 2C3Tの導入 (2年生 英語の授業)

文科省指定事業を受けて、本校では今年度、パフォーマンステストを2クラス混合（もしくは2クラスリモート接続）で行うことにした。2年生を対象に週に1時間、隣り合うクラスで同時に英語の授業が行われるようにして、混合クラスを可能にした。またパフォーマンスに至るまでに学んできたことの確認をするため、単元途中でも2クラス混合の授業を行った。いつもとは違う環境で多くの考え方に触れながら協働学習を進め、異なる学習集団での発信力強化につなげることもねらいの一つとした。2C3Tで考えられる利点は以下の通りである。

- ・TTの先生が2つのクラスを行き来して、より全体的な視点で生徒、授業展開を把握し、改善点を見つけやすくなった。 → 混合クラスにしたときに、生徒の実態も変わってくるため。
- ・教員同士で、授業展開や教材、生徒の実態について共通理解を図る場面が非常に多くなった。
- ・一つのクラスで行うよりも多くの考え方に触れる機会が多い。
- ・慣れ親しんだ相手ではない状況のときに、学んだことをどこまでできるかを試す場をつくることができた。

TTのイメージ (週に1回)

クラス	2年生
201	教員A・教員B (教員C)
202	
203	教員A・教員B (教員C)
204	
205	教員B・教員D (教員C)
206	

- ・英語は週に4時間
- ・隣り合うクラスで常に英語授業が展開される。
- ・週に1時間はTTによる授業が行われる。
- ・基本的に2クラスに1人のTTがつく。
- ・TTは「一緒に授業を行うイメージ」

(2) 研究授業

パフォーマンステストの実践例

①Unit2 「好きなことやしたいことを伝え合う」 5月 通常授業

この単元では、慣れていない集団同士での活動ということで、自己紹介を兼ねた「好きなこと・したいこと」を紹介したり、相手の話をよく聴いて質問をしたりして、会話を続けていく活動を設定した。今年度に入り、初めて2C3Tを開き、混合クラスで実施した。普段とは違う慣れない集団の中で、自分のことを発信していく場面であった。普段とは違う相手のため、答えがわからない中で会話を続けていくことに即興性を求めた。パフォーマンスはタブレットで録画し、一人一つ持っているイヤホンを使って、振り返りを行った。生徒たちは以下のような課題（青枠）をもっていた。

生徒①		授業でやった時分にも英語を話したと思う
2	speaking	質問をたくさんした方がよいと思うので 質問をたくさんしよう。
生徒②		できるだけ質問をする。質問で会話をとまらせない
2	Speaking	ようにすることを心がけました。自分のことについて 話せなかったら、次回は、自分も話したいです。
生徒③		Unit2で習った文法を使って、多数の人に
2	Speaking	自分の好きなことについて話せました。次は もう少し言えたいので、練習をしたいと思います。

単元で行うパフォーマンスを単発で終わらせる活動ではなく、次のパフォーマンスへの課題と改善につなげたいと考えたため、振り返りのワークシートはパフォーマンスの課題が一覧できるものを使用している（後述）。ここで得た課題や成果を次のパフォーマンスでどのように改善していけるかの視点で、生徒は振り返りを行っていた。

②Unit3 「留学先でしたいことを伝え合う」 6月 校内研究授業

5月のパフォーマンスを受けて、6月の公開授業では、「留学したとして、その国でしてみたいことを現地の友人らと英語で話したら・・・」という設定のもと、Unit5より現実的な課題を設定して、質問したり、意見を言ったりして、発信力を高めていくことをねらった。タブレットで複数回撮影しながら、単元を進めていき、課題を自分たちでつかみ、改善していくことをねらいとした。

【課題として・・・】

- 現実的な場面設定か？ → 英語を話す必然性があるか。
- フリーな会話をねらっているが、どうしたら良い姿かを具体的につかんでいるか？
- つまずくと予想されるポイントを具体化し、解決する手段（共有・見せ合い・例示など）があったか？
などがあげられ、授業展開などに改善点が見られた。

【以下の生徒の振り返りを見てみると・・・】

生徒①について、

- 赤枠で囲んだ部分は、Unit2で課題に挙げていたところであり、本人も意識して改善していることが分かる。
- 青枠部分を見ると、パフォーマンスを改善してみて、新たな課題を見つけたと考えられる。

生徒①	3	speaking	<p>質問が多くてたと思う。せけども具体的な質問 してなかったのて先生が「あー」と思えし。</p>
-----	---	----------	--

生徒②について

○赤枠について、Unit2 よりも、よりできるようになった実感があることを示していることがわかる。

生徒②	3	Speaking	<p>休日にしたいことでは行きたいところについて話して しました。話幅広く、いろいろ話題が 出てきて、ほかの人は、イアツがききとらうと 知れました。たんと話がつながるようになっていっけい。</p>
-----	---	----------	---

生徒③につて

○振り返りシート上では変容が見られないが、当日のパフォーマンスではグループを先導するような積極的な発言が見られた。

生徒③	3	speaking	<p>Unit3で習った文法を使ってグループの人に 海外で留学したら何をしたいかということも休日 晴れ雨の場合で話したかできました。</p>
-----	---	----------	--

③Unit5 「防災バッグの中身の優先度は？」 11月 公開研究授業

6月の校内研究授業を受け、本発表の公開授業にはUnit5で「防災バッグの中身の優先度は？」をテーマに会話活動を行う。この単元では、より現実的な場面設定を行った（指導案＞単元構想を参照）。前回の単元末での2C3Tに加え、単元を進めていく中で考え方を共有したり、考えていることをどこまで発信できるかを試す場を設定したりして、混合クラスを複数回展開することにした。

他教科での発信力の見取り

- ①生徒①～③が年間を通じてどのように発信力を向上させていくかを見取り、より授業改善などに生かすために、他教科でも同様に抽出生徒の様子を見て記録している。校内研修で行っている一人一授業と連動していくことにした。
- ②教科ごとに、1（2）で述べているような「発信力の捉え」を行い、英語での発信力、他教科での発信力を比べながら、生徒がより発信力を高めるために、どのような授業展開が必要かを検討できるようにしている。以下は各今日による発信力の捉えの一例である。

国語	<p>筆者の意図や仲間の意思を理解し、自分の考えと比較し、意見を伝えることができる。→安心・発信・受信 例)「筆者が～という思いがあるので、私は～思う。」</p>
社会	<p>☆複数の資料から読み取ったことと、その資料から分かることを複合的にまとめて伝える。 例)「資料1から〇〇、資料2か△△、だから・・・。」(※「だから」を入れる)</p>
保体	<p>☆自分が実施した動きを仲間に言葉や文章で説明できる。(主観) 例)「今の速報倒立回転は一直線に移動するように動いてみたよ」</p>
理科	<p>☆ 仲間の意見に問い返すことができる 例)「でも始祖鳥は牙があるから、本当に鳥類なのかな。」</p>

(3) 発信力を支えるもの

① 学びの積み重ねと問いの発見 (振り返りシート)

生徒① グループのやりとり全体を振り返って、課題は何でしょうか。

反応ができていなかった。日本語も使ってほしかった。質問の量が少なかった。

By the wayの表現を使う。

生徒② グループのやりとり全体を振り返って、課題は何でしょうか。

1 → 話題ができたら、少し長く、その話が終わると、会話がとぎれてしまう。
もと質問をする。自分が話す時、もと話す。話しやすい話題を

質問 → 解答 → 反応 → 質問

By the way で話題を変える。

生徒③ グループのやりとり全体を振り返って、課題は何でしょうか。

質問して答えて反応して終わる → 更に質問
声量を大きくする 答えを詳しくする → ちゃんとしたものにならない。

上記のワークシートは、ある会話活動単体の振り返りである。赤枠のように課題を発見することはできているものの、次に解決されているかどうかは分かりにくくなっている。

英語 振り返りシート		
Speaking		
Unit	Performance	できたこと・疑問・次への課題
1	writing	アドバイス通り字のくまなくも開けるつとけてきたけれど、少し文が短い気がするので前後を少し増やしたい。
2	speaking	英語で何を話しても英語を話したと思われ、疑問を多く聞かれたので、質問を増やしたい。
3	speaking	質問を多くして話を聞かせたい。具体的な質問は聞き取れないので表現をより覚えたい。

そこで、上記のような単元での学びの積み重ねを意識するために、共通した振り返りシートを使用している。その際、研修テーマもある「問い」を見つけ、自ら解決に向かうための糸口となるように、パフォーマンスが一覧できるような構成となるようにした。パフォーマンスでは主にスピーキングとライティングをメインに扱うため、2つの欄が縦に連なるように記載されている。上記の生徒①について、活動内容は異なっても、次のパフォーマンスに向けて解決すべき課題 (赤枠) や、その課題が次のパフォーマンスで解決されているか (青枠) が記載されていることがわかる。

②1-minute talk / 質問シートの活用

発信力を支える活動として、帯活動である 1-minute talk を取り入れている。以下のパターンを行っている。

- ・フリーに始める。 ・設定されたお題で始める。
 - ・教科書「Here We Go」付属 Let's talk を使い、質問から会話を始める。
- その際、「質問・相づち・意見」を常に意識することで会話を続けられるように、相づちなどは教科書の記載を参考にし、質問に関しては質問カードをつくり、質問することに慣れ親しむことで、自然と会話が続けられるようにした。

Hints for Questions

以下のフレーズを参考に、会話の中で、質問ができるようになるよう。

疑問詞	たずねたい形	たずねたい単語
What(何を)	do you ~ (あなたは～ですか)	→
Where(どこで)	did you ~ (あなたは～しましたか)	→
When(いつ)	does ~ (～しますか)	→
Why(なぜ)	are you ~ (あなたは～ですか)	→
Which(どちらを)	were you ~ (あなたは～でしたか)	→
How(どのように)	are you ~ (あなたは～いますか)	→(回答)
How long	were you ~ (あなたは～いましたか)	→(回答)
(どのくらい)	are ~ (～ですか) * 2つ以上のもの・人	→
How many	were ~ (～でしたか) * 2つ以上のもの・人	→
(どのくらいの数)	is ~ (～ですか) * 1つのもの・人	→
How often	was ~ (～でしたか) * 1つのもの・人	→
(どのくらいの頻度)	will you ~ (あなたは～と思いますか)	→
	are you going to ~ (あなたは～する予定ですか)	→
	can you ~ (あなたは～できますか)	→
	(あなたが～してくれませんか)	→
	can ~ (～できますか)	→
	(～が～してくれませんか)	→

③ICT の活用

本校では、Chromebook と Google アカウントを使用している。英語の授業では、パフォーマンスにおいて基本的には録画機能を使って Classroom やロイロノートなどに提出する形で評価などにつなげている。また、イヤホンを一人一つ配布することで、録画したものを個人でじっくりと振り返る時間を確保し、より課題やできたことを確認しやすくしている。



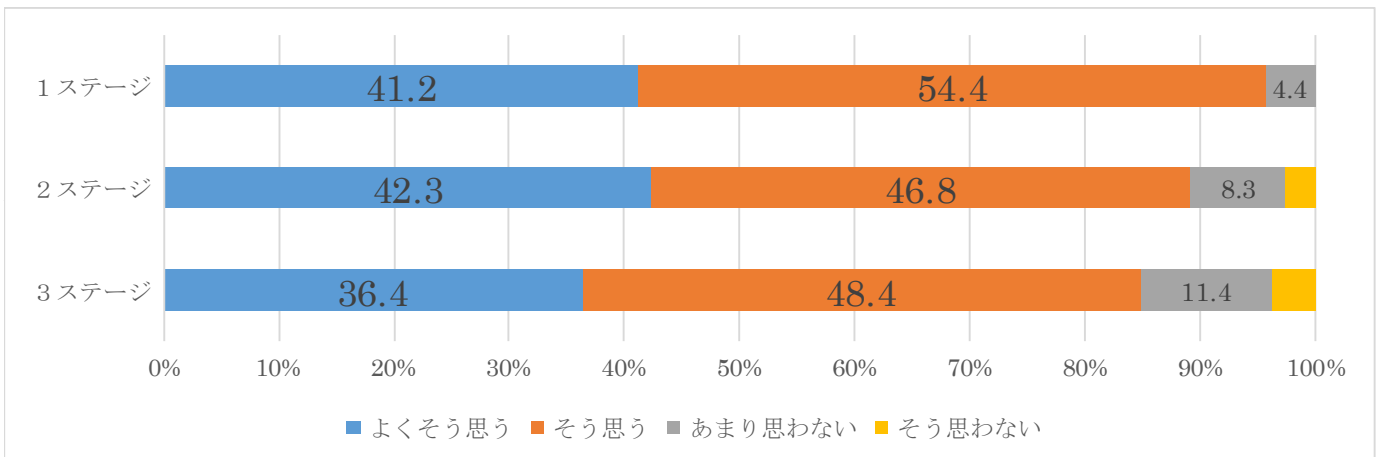
3 【 実践を分析する 】

(1) 評価と項目 ステージごと

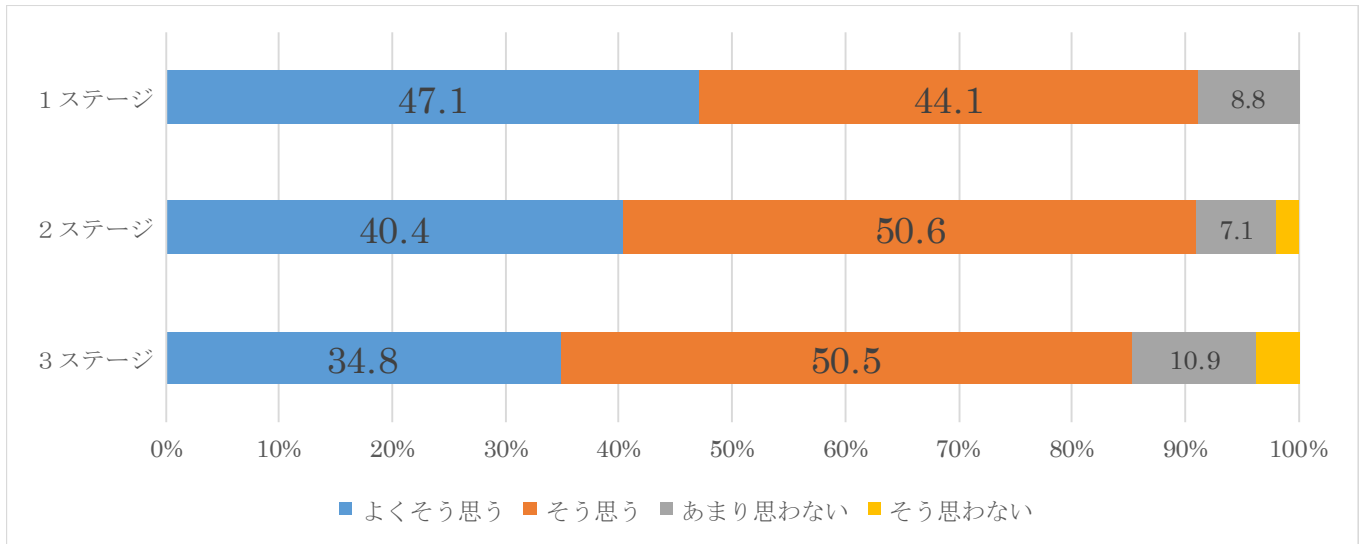
- ①ステージ末に1回ずつ、計5回アンケート（英語科による）をとり、その変容を見る。
- ②タブレット（Google forms）による集計
- ③アンケート項目
 - 英語の授業を通して・・・
 - 1 自分の考えや思いをより多く伝えられるようになった。
 - 2 同じ、違う、なぜを考えながら相手の考えや思いを聞くことができるようになった。
 - 3 相手の話に同調したり反論したりしながら、相手の考えや思いをひきだすことができた。
 - 4 相手に伝えたり、相手の話を聞いたりすることに自信をもてた。

英語科アンケート結果

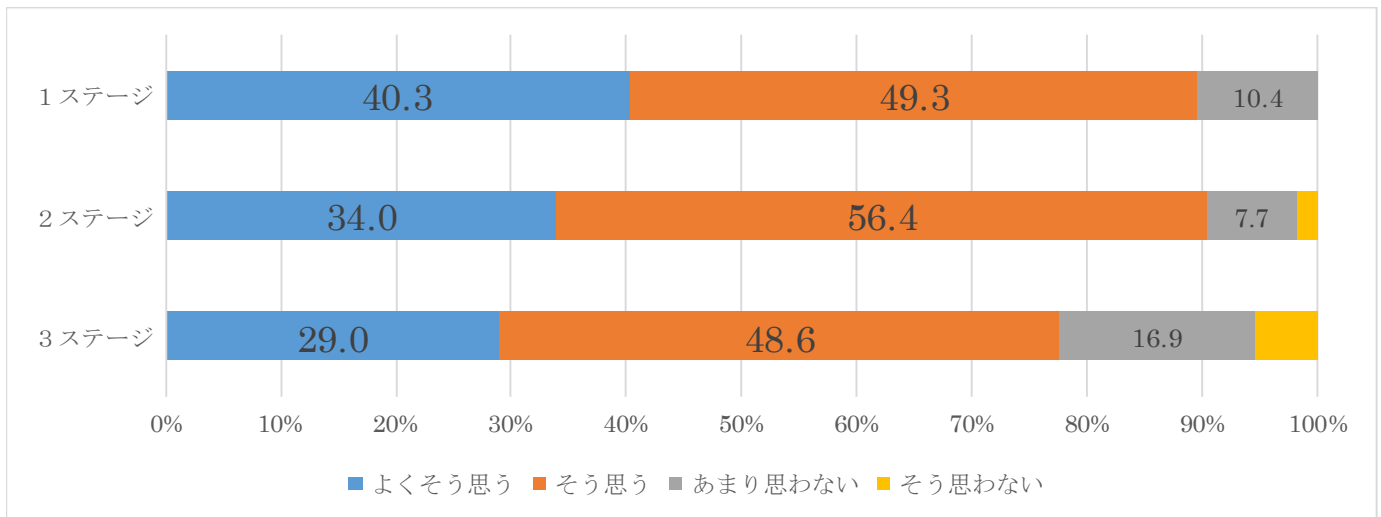
1 英語の授業を通して、自分の考えや思いをより多く伝えられるようになった。



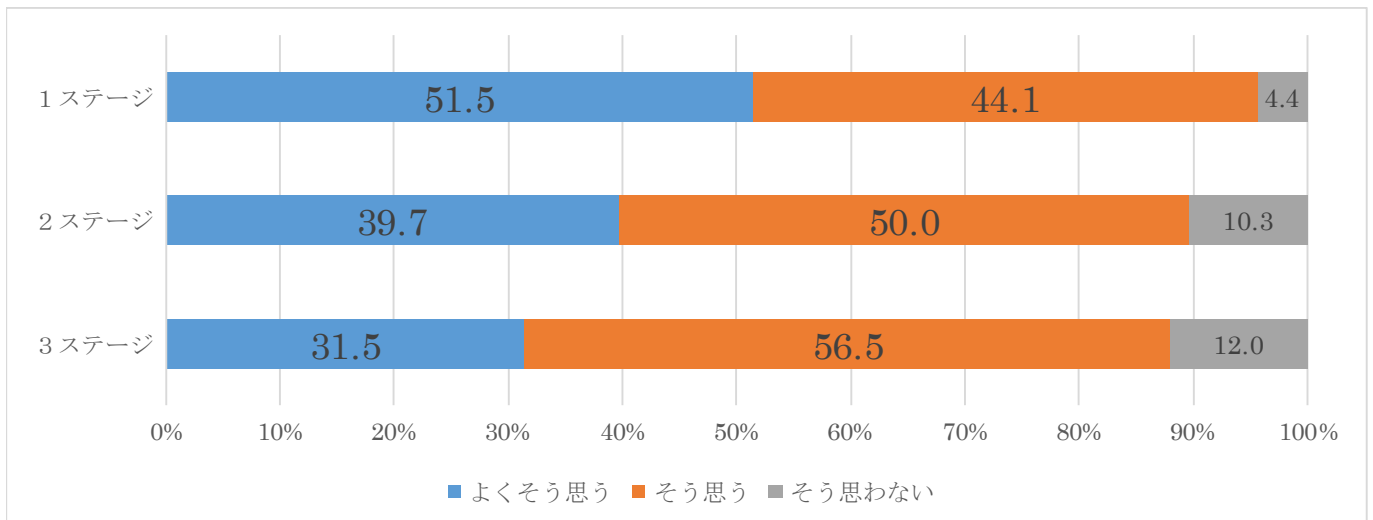
2 英語の授業を通して、同じ、違う、なぜを考えながら相手の考えや思いを聞くことができるようになった。



3 英語の授業を通して、相手の話に同調したり反論したりしながら、相手の考えや思いをひきだすことができた



4 英語の授業を通して、相手に伝えたり、相手の話を聞いたりすることに自信をもてた



校内アンケートの肯定的評価の変容（青文字：前ステージ比増、赤文字：前ステージ比減）

項目	1回目	2回目
1 英語の授業に意欲的に取り組んでいる。	計 95.3% ◎60.0% ○35.3%	計 92.3% ◎54.4% ○37.9%
2 習ったことや、資料・辞書を用いて学習問題に取り組んでいる	計 92.4% ◎45.6% ○46.8%	計 93.2% ◎48.9% ○42.3%
3 授業を通して、以前よりも英語で表現できることが増えた。	計 91.9% ◎62.2% ○29.7%	計 91.1% ◎54.1% ○37%
4 授業を通して、伝えられたことに以前よりも英語で反応できるようになった。	計 91.2% ◎48.8% ○42.4%	計 92.9% ◎48.4% ○44.5%
5 英語の授業を通して、異文化や他国に対する関心が深まりましたか。	計 90.6% ◎48.5% ○42.1%	計 91.3% ◎49.5% ○41.8%

4 【 現状の成果と課題 】

(1) 成果

① 2C3Tによる変化

2C3Tを展開していくことで、複数の担当教員により授業内容を柔軟に替えていく場面が増えた。2C3Tは今年度からの導入であるが、パフォーマンスなどを受けて時数や進捗状況などを揃えていく必要がある。受け持つクラスが、単元のゴールに向けてどういう状態にいるのか、何が必要なのかを話し合う場面が飛躍的に増えた。TTとして入っている教員が2つのクラスを見ながら、実態を把握し、それぞれの教科担当に伝えることでその後の授業展開を柔軟に変えていくことができた。生徒にとっては、普段とは違う集団で話したりワークシートを見合ったりする活動があることで、以前よりも多くの考え方に触れたり、異なる集団で学んだことを試したりする場面が増えた。発信するときに相手への伝わりやすさやより効果的に発信方法を意識するようになった。

② 生徒の問いと課題解決

単元を通した課題設定、2C3Tによる多数との関わり、そして単元間を比較できる振り返りワークシートの使用により、以前よりも生徒が課題を見つけ、解決していこうとする姿が多く見られるようになった。特に「問いをもつ」ことに関しては、本校の研修テーマにも関わってくることである。毎回自分たちが言語活動のために準備したことや、試したことから「問い」を生み出し、2C3Tなどを踏まえて協働学習を行うことで、解決に向かう姿が多く見られた。今年度は文部科学省指定事業を通して、「話すこと（やり取り）」を中心に研修を行ってきた。生徒は言語活動の中で、会話をつなげる手法である「相づち・質問・意見」を意識して取り組んでいた。特に「質問」に関しては、相手の発言をしっかりと聞こうとする姿と、whyだけで終わらせない多様な質問にもチャレンジしようとする姿が見られた。

(2) 課題

① 話すこと（やり取り）の授業展開と支援

授業を考える上で、単元構想をより具体的に構築し、ねらいに向けてそれぞれの授業でどんなことを身に付けていく必要があるのかを明確にすることが求められる。英語授業の中で、「話すこと（やり取

り)」では、場面設定をより現実的な場面に近づけることが必要だと考えた。今年度の2回の研究授業（5月・11月）においては「留学先でしたいこと」「防災バッグの中身」を設定したが、その先にある英語を使う必然性についてはまだまだ課題が残る。本校には日本語に困難を抱えているが、英語を得意とする多数の外国籍生徒が在籍していることや、今年度と来年度に予定されているモルディブとのオンライン授業や総合的な学習の時間を利用した町内在住の外国籍の方々との関わりなど英語を使う必然性は高い。教科横断的な視点をもって、英語授業で学んだことをより現実的な場面を使用していくことを意識した授業展開が必要である。また、(1)②でも述べたように、生徒は自らの課題を掴みながら単元を進めている。そのことで、課題は多岐にわたることが多い。しかし、授業者が何をねらっていて（イメージをもって）、生徒の実態に対しての支援は何をしていくのかを具体的にしなければ、生徒が今何を学んでいるのかが不明瞭になってしまうことがある。単元構想を明確にし、より体系的に英語を学んでいくことが必要だと考える。

② 達成感につなげる

3(1)のアンケート結果から分かるとおり、4つの項目においてステージを追う毎に数値では減少が見られる。これは、従来のような教科書を中心に扱った授業ではなく、より生徒が英語を使えるようにするための授業展開を行ったことで、生徒が何を学んでいるのかがわかりにくくなってしまったことが原因であることが予想される。分かりやすい知識・技能的な授業から、思考・判断・表現的な授業に向かっている過程であると考えられる。振り返りのワークシートや録画したものをしてみると、課題をもって解決に向かおうとする姿は多く見られる。今後、生徒の興味や関心を引き出すだけでなく、できたことの達成感を味わうためにルーブリックの改良やマイルーブリックの作成をして、「英語ができるようになりたい」「できるようになって嬉しい」といった姿がより多くの生徒で見られるようにしていく必要があります。

5 【 今後の展望 】

- ①研究授業を受けて、授業改善につなげること。
- ②話すこと（やり取り）を中心に、より効果的な授業展開や支援を研究していくこと。
- ③英語授業を中心に、他教科での発信力向上のための研修を構築すること。